



「21世紀は、人とロボットと暮らす時代」といってよい。人とロボットとの共生が、新しい段階に入り始めている。そう感じさせる話題が、相次いでいる。これまでは、ロボットセラピーといった癒し効果が注目されてきた。それが、人とロボットとの間の簡単な感情表現や感情移入が可能になり、ロボットは機械ではなく生身の生き物として捉えるべきものになってきている。今回は、この問題について、考えてみたい。

ヒト型ロボットが感情認識をできるようになると？

2014年6月、ソフトバンクはヒト型ロボット Pepper (ペッパー) の発表会を行った。ソニーのキュリオやホンダのアシモなどと違い2足歩行はしない。周囲の状況を把握し人の感情を認識するのである。同社は、世界初の感情認識ロボットと言っている。

同社によれば、「Pepperは、周囲の状況を把握しながら自律的に判断して行動し、人の表情と声のトーンを分析して人の感情を推定できる人型のロボットです。

人との会話以外にも、家族の写真を撮影したり、子どもと遊んだり、スマートフォンと連携して家族にメッセージを送ったりすることが可能で、Pepperとの暮らしを家庭で楽しむことができます」とある。

一見、かわいい賢いロボットであるが、小生意気なロボットという印象も受ける。注目すべきは、日本テレビの番組「ダウンタウンのガキの使いやあらへんで!!」(2014年9月7日放送)に登場したPepperとダウンタウンのやりとりである。

浜田雅功がPepperの頭をいきなりドツキ、周りタレント達から制止された。小賢いPepperの応答が、浜田の神経を逆なでしたのである。このドツキ映像はネット上に公開されている。

Pepperによる人との対応は賢い(?)半面、小憎らしい、生意気といった面が強い。これまでの、ロボットセラピーを目指した癒し系ロボットとは、一線を画している。

このロボットは、開発者用に先に市販されているが、一般向けの販売は、2015年夏に延

期されている。本体価格は 198,000 円で、ロボット手続き手数料 (9,800 円) が別途、必要になる。

Pepper は、「ロボアプリ」を組み込むことにより、いろいろな機能を追加することが可能となる。Pepper が今後どのように賢くなり、人間との複雑な応対が出来るようになるかについては、今後の様子を見守りたい。

人とロボットとの共生は、ハッピーエンドになるのか

最近、人とロボット犬との関係が問われる事件が相次いでいる。一つは、ネット上で物議を醸している動画である。これは、人が自立歩行しているロボット犬を蹴飛ばしているシーンを映しているものである。この動画に対して、ロボット犬であっても動物虐待だと批判する書き込みが相次いでいる。

皮肉なことに、この動画は、どんな状況でも自立歩行ができる優秀さを、世間にデモンストレーションしようとしたものであった。蹴飛ばされてもちゃんと歩き続けられる程、性能が向上したことを紹介しようとしたのが、逆の結果になってしまった。

このロボット犬は、ロボット研究開発で有名なベンチャー企業のボストン・ダイナミクス (Boston Dynamics) 社が開発した自立歩行型のロボット犬「Spot」である。

軍事における捜索救済活動用として開発されたもので、階段や未舗装の道も歩行でき、それまでのロボット犬よりも小型化しており、動きもスムーズになっていた。

もう一つの例は、ペットロボットの死にどう対処するかである。ソニーのアイボ (Aibo) は、ペットロボットという新しい領域を開拓した。最近では、「夢ねこセレブ」(セガトイズ、2014 年 7 月発売) や「ハローズーマー Omnibot Hello! Zoomer」(タカラトミー、2014 年 7 月発売) といったペットロボットが、人気を集めている。

日本は、いまやペット大国といってよい。少子高齢化とペットブームの振興により、犬の登録数は子どもの数を超えている。

今やペットは家族の一員であり、ペットの葬式まで行う人が増えてきている。生き物のペットの中に、ペットロボットも加わってきている。

この愛玩ペットロボットの先駆であるアイボ (Aibo) の死と再生が、大きな関心を集めている。ソニーがロボット市場から撤退することになり、アイボの修理も 2014 年 3 月に打ち切りとなった。動かなくなったアイボは、完全な死を迎えることになり、これが世間の注目を集めた。

このアイボに救世主が登場した。元ソニー社員であり、クロモノ家電の修理会社「A・FUN」(ア・ファン、千葉県習志野市、2011 年起業) である。家電メーカーを退職したエンジニアが集まって修理をする会社が、アイボの再生を始めたのである。

飼い主にとってペットロボットは、機械ではなく生き物である。メーカーの都合で、生産・修理を一時的に打ち切ることの是非が問われる時代を迎えている。

また、カワイイだけでなく賢くなっていくペットロボットは、飼い主を時には怒らせ虐待の対象にもなってくる。家族の一員となったペットロボットの虐待が問題視される時代が、間近にきているのではないだろうか。

(TadaakiNEMOTO)